て資財を貸り之を償ふものすらあつたが、藩吏の之に處する方法宜しきを得なかつた爲、奸商の買惜によつて、九年七月には米穀の貯藏皆無ならざるに拘らず、之を購ふこと困難なるに至つた。然るに八月前田綱紀國に就き、胥吏を處罰し、人を領内に派して飢民に食を施し、善後の策を講ぜしめたによつて、餓死するもの纔かに十五人に止つた。

（二）寛文の飢饉—寛文九年夏秋の交暴風強雨屢至り、領内の河川氾濫して五萬八千石の田を損じ、死者十人を出し、登穀少くして乞丐となる者多かつた。因つて前田綱紀は十月十二日から十九日に至る間、金澤玉泉寺及び東本願寺末寺に於いて施粥を行はしめ、農村より入り來る飢民の數を調査し、翌十年郊外笠舞村に非人小屋を作り、六月廿二日その竣成するに及んで、先づ千七百五十三人を收容した。

（四）天保の飢饉—天保四年夏寒く、米穀登らなかつた爲に飢民を生じ、五年に入つて藩の非人小屋に收容せられるもの平常に數倍し、疫癘亦行はれて死者も多かつた。然るにその年の秋豐作で、一旦景氣を回復したが、六年冬雪降らず、七年立春の候俄に大雪を見、夏に入つて冷氣甚だしく、再び凶作となつた。併し八年秋には作況良好であり、所々に隱匿せられた米穀も市場に現れた。次いで九年五月土用の頃からまたもや冷氣を感じたので、寺社に祈禱を命じ、十月には貧民收容所増設などの事があり、十年は上作であつたが、八月浮塵子を發生して大に收穫を減じた。これらに就いては更に別項に詳述する。↓テンポウノフサク　天保の不作。

（五）明治の飢饉—明治二年氣候不順、貧民飢餓に陥るものがあつたから、金澤藩は管内の酒造額を例年の三分の一に減ぜしめ、米十九萬六千石・錢五萬六千貫等を賑恤し、三年正月各官員職俸の半を割いて義捐せしめ、前田慶寧は歴世所藏の古器珍寶を大坂に賣つて救濟の資に充て、士民亦競うて金品を提供した。

キキン　飢饉（大聖寺藩）（一）天和の飢饉—天和元年前年の凶作により救米を藩から與へた。秋までに死者二千五百餘人。

（二）正徳の飢饉—正徳二年秋凶作の爲に百姓から年貢輕減の請願をなし、遂に一揆の激發を見た。

（三）天明の飢饉—天明三年凶作により年貢の免切を許し、救米も給與したが、四年郡方に飢民を出した。

（四）天保の飢饉—天保七年の飢饉は海内一般のことであつたが、藩侯前田利之自ら粥を食して窮民を恤み、八年領内今立では五十三戸のうち二十六戸のものが死亡した。同十年秋又非常の虫害があつて、收穫殆ど皆無に近く、在江戸の藩侯前田利平は九月急に歸郷を許されて、その救濟に當つた。

キク　規矩　↓カネノリ　規矩。

キクエ　きくえ　珠洲郡上山の内の小字。

キクカダイエイ　菊花題詠　一册。嘉永五年菅公九百五十年祭に當り、金澤如來寺の俳知一が、詩人五十名に雜題各二首を賦せしめて北野神社に納めたのを、大島桃年がその中から菊を詠ずるものゝみ二十五篇を摘出して一卷となしたのである。

キクガダケ　菊ヶ嶽　石川郡に在る。寶暦十三年調書に、倉谷山・三方山の續に菊ヶ嶽があり、その西面の地に菊がある。白き一重の花で野菊に似てゐるが、葉莖は普通の菊の通りであると記する。大路水經犀川の條に、奥に二谷がある。西谷は二俣村の領、東谷は倉谷山の領である。西谷大陸子谷の東の小溪に菊花多く、この谷の滴り流れるによつて菊水川ともいふとあるのも、前記の菊ヶ嶽と同一である。

キクカハチヨウ　菊川町　金澤の町名。文政二年川上新町に定芝居小屋を置いた時、その附近に菊川町・竹嶋町・末吉町などの新町名を設けた。然るに明治四年四月戸籍編成の際、竹嶋・末吉の兩町を合併して菊川町のみとした。菊川の名は、犀川を菊水川と雅名したからであらう。

キクガミソ　菊ヶ溝　江沼郡瀧ヶ原領の谷で、その奥の生水ヶ瀞を以てせめとする。菊ヶ瀞から二〇〇米餘岩山に上れば、自然生の菊があつて、季秋白瓣黄心一重にして香氣ある花を開く。大江知言の歌に『眞柴かる人も通はぬ奥山に何を種とて咲ける白菊』

キクゲンポウベツシユウ　規矩元法別集　二册。天明六年に金澤の三池流の算者宮井安泰の著した書で、測遠術を述べたもの。その師石丸賢の奥書がある。

キクゴクインギン　菊極印銀　寛永十五年加賀藩は、菊花の極印ある銀貨の製造を命じて、朱染紙封となし、九月五日以後從來通用の新極印銀及び取込銀の通用を禁止した。新極印銀より前の今極印銀は、品質良好であつたから既に存在しなかつたのであらう。菊極印銀は甚だ劣等であつたのみならず、小間銀をさへ多く混じて封せられてゐた。

キクザクラ　菊櫻　金澤兼六園内千歲橋の側にある櫻樹は、昭和三年五月理學博士三好學氏によつて兼六園菊櫻と命名せられ、同年十一月天然紀念物として指定せられた。その花は特異のもので、萼片七瓣乃至一〇瓣あつて二重に並び、淡綠色に稍暗紅を帶び、蕾はその小なる時に於いても萼片の間から濃紅の花瓣を現し、成長に從ひ毬形を呈し、花心附近から三枚乃至六枚の葉狀心皮を露出する。萼には萼筒なく、花梗の尖端から直に分裂する。雄蘂一〇本乃至二〇本。花瓣は初め濃紅色であるが、漸次淡紅となり白色となり、その數多きは花心の小鱗片を併せて三百餘に達し、花托部の頭狀に隆起した部分に附き、周邊から漸次中央に向かうて開展し菊花の觀を呈する。花の直徑約四糎。花期長く、四月二十日蕾の膨脹を見、月末滿開し、五月中旬尚殘花を有する。

キクザケ　菊酒　俳書、一册。横本丈け四寸三分、幅六寸四分、十三枚綴。題簽はなく、最初に菊酒付句春とあつて、今村幽也・一烟・可之等廿三人の付句の拔書があり、その後に『さんぼう足うらに神の勝やかはらけ菊酒にそへて』と書出した卯辰山長谷觀音參詣の文の終に延寶四年三月上旬と記し、更に一烟の發句のみ百句を並べてある。阿誰軒俳諧書籍目錄に『同（白山奉納集）追加、菊酒付、一册、同（伊勢住慶彦神主）、同とし（延寶六年）』とあるのは是で、本書に板元を書いてないが京井筒屋の出版と見える。但し内容から見てこれは宇野一烟の著で、慶彦の白山奉納集の追加としたのは誤であり、また書名も菊酒付ではない。現存加能俳書中の最古のもの。

キクザケ　菊酒　石川郡鶴來に產した名釀で、酒の澱滓が底に集る時、恰も菊花の狀を